Jayanta による〈アートマン直接知覚〉論批判

佐々木幸貴

0. 〈アートマン直接知覚〉論とは「アートマンは〈私という観念〉(以下『私』)の対象として直接知覚されている」という主張を意味する。周知の通り，Nyāya 学派の **Jayanta** は，その主張を「ウパヴァルシャ派の人たち」と「自派の一部の人たち」のものとして紹介しており[1]，それは **Kumārila** が *ŚV*, *āv* で言及するものと同趣旨である。しかし，**Jayanta** がそれを否定していることについては，あまり注意が払われていない。本稿の目的は，その否定論のポイントを明らかにすることである。

1. *ŚV*, *āv* において **Kumārila** は，身体や識は認識主体でないことを論証した後，『私』の対象が身体などとは異なるもの，すなわちアートマンであることを，以下のように論じる：**【1】**『私』は錯誤ではない[2]。**【2】**「私は知る」などの観念があるから，『私』の対象は認識主体である[3]。**【3】**「私は太っている」などのように『私』が身体などを示している場合もあるが，これは錯誤である。なぜなら，「私の…」(e.g.「私の身体」「私の腕」) という所有格表現が見られるからであり，それは『私』の対象と「…」とに区別があることを意味するからである[4]。**【4】**「私のアートマン」という表現もあるが，これは同一のアートマンにおける性質上の区別が表現されているのであって，本質的な区別ではない[5]。**【5】**従って，『私』の対象は身体ではなく，アートマンである。

2. 以上の議論に対し，**Jayanta** は「どうして認識〔という行為〕が同一であるのに，アートマンが主体 (kartṛ) でありかつ客体 (karman) であろうか？」[6] と述べている。これが彼の批判の根拠である。以下〈主客同一の矛盾〉と呼ぶ。

〈主客同一の矛盾〉は **Jayanta** 自身の発想ではなく，**Kumārila** 自身も，*ŚV*, *śnv* において仏教徒の説を批判する際に用いている[7]。従って〈主客同一の矛盾〉は両者により同意されていることから，**Kumārila** 側も〈主客同一の矛盾〉そのものを否定することはできない[8]。

ところが，**Kumārila** は，*ŚV*, *śnv* k. 68 において「アートマンは本質的には同一であっても性質上の区別をもっており，『私』の対象となっているアートマ

ンは実体としてのアートマンであり，認識主体たるアートマンではない」[9]と述べ，アートマンには〈主客同一の矛盾〉がおこらないとする。【4】の議論もこの *ŚV*, *śnv* k. 68 に基づいてなされている。

しかしこの主張は，【2】と矛盾してはいないだろうか。【2】は，アートマンが認識主体として『私』の対象となっていることを意味するのではないのか。**Jayanta** いわく，「アートマンが実体などとして把捉されているのであれば，認識主体が把捉されていることは未だ証明されていない」[10]と。

ŚV の注釈者 **Uṃveka** は，その矛盾を回避しうる議論を行っている。彼は「私は壺を知る」という知をとりあげ，それは実は「壺を認識しているアートマンを私は知る」という知であるとし，その場合の認識対象は〈認識対象である壺に限定された認識主体〉であり，他方それを認識しているのは，なんら限定条件をもたない〈純粋なる認識主体〉であるとする[11]。このように考えれば，確かに，アートマンが認識主体として把捉されていることになる。しかし **Jayanta** は，「私は壺を知る」という知はあくまで壺に注意を向けているのであり，決して認識主体に注意を向けているわけではないと否定する[12]。

3.　このような議論により，**Jayanta** は，『私』の対象は身体であるのがよいと結論する[13]。その場合【3】と【4】とが問題になる。【3】に対しては，**Jayanta** は「『私のアートマン』という所有格表現もあるではないか。」[14]と反論する。【4】に対しては，**Jayanta** は，この時点ですでに（本稿 **2** で述べたように）アートマンにおける性質上の区別を否定してしまっているが，なおかつ次のように批判している：「アートマンに性質上の区別を設定することにより，「私のアートマン」という観念の成立を説明できるのであれば，身体にもなんらかの区別を設定して，「私の身体」という観念の成立を説明できることになる」[15]と。

Jayanta 自身は，「私のアートマン」「私の身体」を共に錯誤であるとする。その理由は，前者の場合アートマン（＝認識主体）は知覚されないからであり，後者の場合身体にそのような区別はないからである[16]。そして身体などとは異なる認識主体の存在は推理によって知られ，その名が「アートマン」であることは証言（āgama）により知られる[17]，という。

4.　**Kumārila** の議論は，『私』の対象がアートマンであることを，論理的に証明したものである。またそこでは，「私は…である」という同格表現と「私の…」という所有格表現とが考察される。しかしその根底にあるのは「アートマンは身体などと異なるか否か」という問題である。なぜなら彼が論争相手としている

〈身体＝アートマン〉論者も，【2】を前提とした上で，「私は太っている」などの観念があることを理由に，認識主体は身体であると主張しているからである[18]。しかし **Jayanta** は〈主客同一の矛盾〉により【2】自体を否定する。従って，**Jayanta** 自身は何も述べてはいないが〈身体＝アートマン〉論者も〈主客同一の矛盾〉に陥ることになるだろう。一方，所有格表現に関する **Kumārila** の議論は，一見『私』の対象がアートマンであることを示す根拠として行われるようだが，実際はその逆，すなわち〈身体などアートマン〉が論証され，【2】を前提として初めて成立する議論といえる。従って【2】が否定されると，本稿 **3** のように，彼の論法は『私』の対象が身体である場合もあてはまることになるのである。

略号 *NM*＝*Nyāyamañjarī* (Mysore, vol. 2, 1983); *ŚV*＝*Ślokavārttika* (Varanasi, 1978), *śnv*＝śūnyavāda; *āv*＝ātmavāda

1) see *NM* p. 268^{7-8}.
2) see *ŚV*, *āv*, k. 125cd; *NM*, p. 269^{14-15}.
3) see *ŚV*, *āv*, k. 126; *NM*, p. 268^{13-14}.
4) see *ŚV*, *āv*. kk. 127-129; *NM*, p. 269^{12-14}.
5) see *ŚV*, *āv*, kk. 130-131.
6) see *NM*. p. 270^{6-7}.
7) see *ŚV*, *śnv*, k. 64.
8) see *NM*, p. 270^{8-9}.
9) see *ŚV*, *śnv*, k. 68; *NM*, p. 270^{2}.
10) see *NM*, p. 270^{13}.
11) see *Ślokavārtikavyākhyātātparyaṭīkā* ad *ŚV*, *śnv*, k. 70 (Madras, 1971, pp. 257-258); *NM*, p. 270^{16}-p. 271^{1}.
12) see *NM*, p. 271^{16}.
13) see *NM*. p. 272^{1-6}.
14) see *NM*, p. 272^{9-10}. これは Kamalaśīra の Uddyotakara 批判を思い起させる。cf. *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Baroda, vol. 1 1984), p. 90^{24-27}.
15) see *NM*, p. 272^{11-12}.
16) see *NM*, p. 272^{15-16}.
17) see *NM*, p. 280^{5-7}.
18) see *Mānameyodaya* (Madras, 1975), p. 200; cf. *ŚV*, *āv*, kk. 132-133ab.

〈キーワード〉 アートマン，私という観念，主客同一の矛盾，Jayanta, Kumārila

（東北大学大学院）